

来年は開場 55 周年。2 日間にわたり感謝祭コンペ開催。
来年度の年間スケジュール決まる。

来年は塩原カントリークラブがオープンして 55 周年に当たる。その年間スケジュールが決まった。開場記念祭としてのコンペは 4 月 13、14 日の 2 日間。前半 9 ホールのハンディ戦(新ペリア)で、パーティーは行わないが、豪華賞品が用意される。3 月から 12 月の毎月第 1 日曜日に開催される月例会のうち、5 月、11 月については第 2 日曜日に移される。これは第 1 日曜日が 5 月はゴールデンウィーク中、11 月は 3 連休の最終日で、それぞれ行楽客の車で高速道路などの渋滞が予想されるため、第 2 週に移される。

また、11 月 5 日に開かれた競技委員会で、クラブ正式競技会として、グランドシニア選手権大会を設けることを決めた。開催時期を来年 11 月としたほか、参加資格など大会要領は今後決定して告知する。メンバーの高齢化が進んでいる折、多くの参加を呼びかけている。



【開場 50 周年記念感謝祭時の写真】



コース整備基金、現行50円を100円アップ。
プレーフィーは5年冬季、6年シーズンとも据え置き。

第131回理事会が10月20日に開かれ、令和5年度冬季、6年度シーズン料金について審議した。正会員で平日(火曜日を除く)4,900円、火曜日4,300円、土日祝祭日5,400円の冬季シーズン(令和5年12月1日～令和6年1月8日、令和6年3月9日～4月19日)、平日3,900円、土日祝祭日4,100円の冬季シーズン(令和6年1月9日～3年8日)の冬季シーズン料金、平日(火曜日を除く)5,400円、火曜日4,900円、土日祝祭日6,800円の令和6年度シーズン料金を基本とする、料金の据え置きを了承した。

ただ、現行50円の協力を得ているコース整備基金について、前回理事会で50円引き上げを了承したが、これについて再検討が行われた。国体開催を機にコース整備も強化され、グリーン、フェアウェイともに見違えるように整備されたが、枯れた赤松の処理、松食い虫の防除、カート道の舗装など課題は尽きないのが現状。このため、コース整備でもう一步の高みを目指すため、「さらに、50円を上乗せしてはどうか」という意見が大勢を占め、理事会として現行(50円)から100円アップすることを了承した。

現在、プレーフィーのほかに、県ゴルフ振興基金50円、コース整備基金50円の計100円が徴収されているが、これが200円となる。来年4月のシーズン料金から実施される。

御協力に感謝。ありがとう！浄財10万3,386円。～「松の木基金」～

昨年末から、松枯れ対策の一助するため、フロントに「松の木基金」として募金箱を設置、メンバー、ビジターを問わず浄財を募っていた。このほど、開封して集計したところ、10万3,386円が寄せられていた。現在、松枯れ対策としての必要経費は、枯れた松の処理費だけでも年間200万円を超えるため、この貴重な浄財も対策のために有効に使わせていただきたいとしている。



【既に枯れ松処理した南コース No.9 にあった赤松】
枯れ松はこのように茶色に変色。



「隠れた宝石、行ってみたい、塩カンを絶賛。ゴルフ誌「GOLF TODAY」(ゴルフトゥデイ 12号、三栄書房)で紹介される。

ゴルフ雑誌のゴルフトゥデイで、行ってみたい！時空のゴルフ旅として連載25回目となる名物コラム「隠れた宝石」で塩原カントリークラブが、「スコットランドの風を感じ、そして温泉を満喫しよう」と4ページにわたり、三田村昌鳳氏のペン、細田榮久氏のカメラで紹介されている。

「澄み切った空気が、よりいそう鮮やかさを与えてくれる。その澄明なフェアウェイの中で白球だけが空気を裂くように飛んでいく。光の彩りと木々の隙間から織りなす風景。木洩れ日のコントラストに、思わず佇んでしまうほどだ。カップに入るボールの音もいつもより余韻が深まる」

塩カンでプレーしている時に、こんな散文が浮かんできたという。

全体的にフラットで典型的な林間コース。でもあなどれないのは、グリーンが小さく砲台グリーンやフェアウェイからグイッとグリーンが左右に振れていたり、ティショットから落とすところと戦略を立てないとスコアが結びつかないと評している。

高橋完プロから、「ショートゲームやパッティングを磨くのには絶好なのです」と教わったという。奇をてらったホールもなく、まるで教科書的でクラシカル匂いがするから好きだ。塩カンの魅力をこう言い表している。

秋の紅葉はきりりとしていて、その美しさは那須周辺全体に行き渡っていると、那須塩原周辺は、宝物でいっぱいだと締めくくっている。三田村氏は元アサヒゴルフ編集長で、日本ゴルフ協会オフィシャルライター。



塩原カントリークラブ！攻略編！！【南コース】 — 中里 鉄也プロ —
☆ 南コース3番 ☆



【コース解説】

ややうち下ろしのショートホール。

【中里プロからのアドバイス】

1打目はグリーン手前と左にバンカーがあり直接狙っていくと奥に落としてしまう。

グリーンとグリーンの間止めてアプローチで攻めたい。

ピンの位置に注意して攻めたい。

グリーンは手前から受けて見えるが手前から転がり距離感が難しい。

次回は、南コース4番を紹介します!!

正会員権 20 万円で記念販売。開場 55 周年を記念して。

塩原カントリークラブの個人正会員権は消費税込み25万円(消費税込み)で新規販売されているが、令和6年が開場55周年に当たるのにちなんで、令和6年10月31日までの期間限定で20万円(同)で販売する。

入会資格は会員の紹介、ゴルフ場の推薦があるか、入会審査基準に適合する方で、年齢制限はない。入会申込書、印鑑証明、経歴書、写真(5×5㌘)、メンバーズカード・ネームタグ申込書を提出する。入会審査を経て入会許可者には入会決定通知書が送られ、会員権料、年会費2万7,500円などの必要経費を払い込む。入会申込書はカントリークラブのフロントで問い合わせを。

椎間板ヘルニア

佐々木勉のレッスンを受け、江場友幸のスイングにも磨きがかかり、精度も高くなった頃、小針春芳の練習ラウンドに付き合わせてもらえるようになった。小針は一度打つと首をかしげ、グリップの皮テープをほどき、緩衝材の厚みを変え、巻き直しては次のホールに向かった。それは、「もっと良く、もっと……」と、あくなき探求心をみせつけた。そうしなければ、そのクラブを試合で使うことはなかった。

江場のスイングを見た小針が「いいね」と感想をもらし、「誰から教わっている」と聞いてきた。「佐々木という先生です」と答えると、小針は「そうか……」と得心した表情を見せた。佐々木は小針よりはずっと先輩で、試合の戦績で注目させるものはなかったが、長身でそのスイングの美しさは、プロをもうならせるような人だった。その佐々木のラウンドレッスンは厳しいものだったが、おかげで江場の力もついてきて、大人に混じってオープン競技にも参加し、ベテランアマの目を見張らせることも幾度かあった。

高校三年生になって間もなくだった。あるオープン競技のスタート前に、練習場でドライバーを打った時、腰に激痛が走った。耐えきれずに救急車で病院に運んでもらった。診断は「椎間板ヘルニア」、それも重度で、競技ゴルフのようなスポーツは、「一番悪い。競技ゴルフはまず無理でしょう」というのが、最終的な診断だった。それから、二年間はコースに出られなかった。たまには練習場でクラブを振ったものの、いつの間にか思い切ってボールを打つことが怖くなってしまった。

高校の卒業を前に、将来の進路を思い悩む日々が続いた。弟の将来を心配した長兄が日本大学の建築科に行けと勧めてくれた。中学生の頃、黒磯市に本社を移した兄の会社で、新築家屋の設計図の写しなどを手伝わされ、その出来映えに感心されたことがあった。それを覚えていた兄からは、「知り合いの教授に話しておく」とまで宣言されてしまった。

家系に画業に携わった先祖や親戚がいたわけではないが、なぜか絵を描くのが好きだったし、友達よりはうまかった。風景や静物を写し描くだけではなく、デザインにも興味があった。どうしても、兄の薦めには乗れなくて、当時、ガンを患っていた父に胸の内を打ち明けた。父は兄が奔走して手配した、治療が終わったばかりの放射線治療を受けていた。痩せ細った父は点滴の管をつけたまま、病院の屋上まで一緒に上がってくれて、か細い声ながらきっぱりと言ってくれた。「好きなように生きればいい」。その言葉で、武蔵野美術大に進むことに決めた。

実は父の友人に美術の教師がいて、誘われてはよく写生に出掛けたことがあった。その度に「うまくなった」とほめられ、道具一式をプレゼントされ、油絵にまで手を伸ばすようになっていた。ゴルフと油絵の取り合わせは、今風に言えば、“シティー派”の典型だった。

運命のコンパ

学生語で「ムサビ」に入ってさほどたっていなかった。青山学院大など何校かの学生と、東京・青山でコンパと称する飲み会があった。どんないきさつだったかは忘れたが、それに顔を出した江場にとって、あまり居心地のいい場ではなかった。盛り上がるその場の雰囲気の中で、一人しらけて時を過ごしていたら、一人が立ち上がった。「あした早いので失礼するよ」。「度胸がいいな」と思って、江場は思い切って声をかけてみた。



「明日は朝からゴルフなんだ」

「エッ、ゴルフ。おれもやりたい」

「やるなら、一緒に行こうよ。道具はうちにあるから」

勧められるままにその学生の家に行くと、応接間に招じられて度肝を抜かれた。その窓辺いっぱいゴルフセットが置かれていた。「ここはプロゴルファーの家か……」と思って聞いてみると、父親がウッドクラブのメーカーの社長だった。次の日のゴルフは、父の名代として行く、販売会社の接待だという。

そのまま泊めてもらい、次の日のラウンドに付き合った。千葉のコースで、午前中は2アンダー、午後は1アンダーで回った。「半端じゃないね」「我々と球筋が全然違うよ」。久しぶりのプレーだったが、体が忘れていなかった。プレー後、その学生の自宅でのパーティーに呼ばれ、父親と言葉を交わした。ぶしつけとは思ったが頼んでみた。

「実はプロのクラブの修理を手伝ったことがあります。新品はどんな風にして作られるか見せてもらえませんか」。那須ゴルフ倶楽部のプロ室で頭にわき上がったあの好奇心を満たす絶好のチャンスだった。「いいよ、明日、工場へくれば見られるよ」の返事に江場の心は躍った。

次の日から大学にも行かず、工場に通ってクラブ作りの工程、三人いた職人さんたちの手先をつぶさに観察した。休憩時間には、職人さんのお茶を入れ、クラブ作りの注意点、コツなどを根掘り葉掘り聞き出していった。五日目が終わった頃だったろうか、職人から苦情が出た。「質問攻めで、仕事にならない」。工程ごとに質問を投げかけられて、仕事に差し障りがあるという。

社長はこの訴えに困り、「これからは、職人が帰った六時過ぎに來い。私が教えてやろう」と言い渡された。あきれられたのか、熱心さが社長の心を動かしたのか。江場はこれで、クラブ作りを習得出来ることになった。だが、大学の授業もあったし、絵の実習もあったから、すべての工程が身についたと実感するまでに一年半はかかった。

作り方がわかったら、今度は自力で作る欲望にかられた。「自分のクラブを作ってはいけませんか」。こわごわ社長に申し出ると、「いいよ、ここにある木はどれを使ってもかまわない」と鷹揚に許してくれた。そこにあった木は、輸入したパーシモンのクラブヘッドの素材で、アメリカから輸入して備蓄されていたものだった。

工場には、ボール盤やドリルなど、クラブ製作に必要な機械、装置はそろっていたが、社長からは出来るだけ、手作りするよう勧められた。江場は素材を何度も見比べて選び出し、1番と3番ウッドを完成させた。社長はそれをつぶさにチェックして言った。「申し分ない。もう君に教えることは何もない」。後で社長が明かしてくれたところによると、江場が選んで使った素材は、その硬さや、きれいに揃った木目の綺麗さから、「自分が作る時にはそれを使う」と決めていた逸品だったという。ドライバーはその素材選びがこの上なく大事だった。

ドライバーが作れるならアイアンも。そう考えたのは、クラブ作りに興味を持つ人間としては、必然だったかもしれない。東京都内にアイアンクラブ専門のメーカーは少なく、江場が調べた会社の製品は、フェースが微妙に波を打っている感じがして、商品としてはとてもいただけなかった。

ウッドの作り方を手ほどきしてくれた社長に、「今度はアイアンも作ってみたいんですが」と相談した。さすがに社長も、二の句がつけぬという顔をしたが、兵庫・姫路にアイアンクラブの製造業者の組合があって、その組合長の所がいい製品を作っていると教えて、その社長に取り次いでくれ



た。「居ても立ってもいられなくなり」、姫路に出掛け、その製作所で職人に聞いた。鍛造で作るための工程、素材の鉄材の善し悪し、打ち込んだ鉄を冷却する砂……。小生意気な学生の問いかけに、「じゃ、お前がやってみな」と突き放されてしまった。

アイアンクラブ

その程度でひるむ江場ではなかった。製作所の社長に「自分のクラブを自分で作ってみたい」と話し込んだ。「いいですよ。どうせなら、いいものを作ってみなさい」。拍子抜けする答えが返って来た。社長は追いかけるように、鑄型をつくるために、まず木の型を用意しなければならないことを告げた。それまでに、製作所で使った木型を見せ、「これと鑄型を作るのに、十本セットとして、百三十万円はかかるよ」。社長はおそらく、これを聞けば諦めるだろうと踏んで、気軽に応じたに違いなかった。

鍛造ヘッドは、木型をモデルに、クラブ本体よりも硬い素材を削って鑄型を作る。クラブの表裏の鑄型でワンセット。鑄型の間熱した鉄素材を置き、プレス機で上下に加圧して原型が出来上がる。プレス機がなかった時代には、ハンマーでたたいていたから、鍛冶屋仕事だった。プレス機で圧縮するようになって、「鍛造」と呼ぶのはその名残からだろう。

その頃でも、昔の鍛冶屋のように真っ赤に熱して、ハンマーで叩いて鉄を鍛える、純粋な鍛造技法を採り続けているのは、刀鍛冶の世界だけだった。江場は鉄の鍛え方、それによる鉄材の粘り気の違いなどを知りたくて、何度か刀鍛冶の元へも足を運んだ。


プレス機での圧縮は、鯛焼きと同じように、上下で圧縮した隙間から、素材がもれて鯛焼きのヒレのようなものが残る。これを「耳」と呼び、それを削る作業を「アラ取り」と言った。そこに、職人技による味が出てくる。これに対して、鑄造クラブは砂を固めた鑄型に溶かした鉄材を流し込み、それを冷まして鑄型を砕いて取り払えば出来上がる。しかし、この方法では、冷却段階で気泡を生じてもろさにつながる。鑄型を作るために砂ではなく専用のオイル素材が開発され、大量生産が可能になったが、製品のもろさは宿命的なもので克服されていない。江場も鍛造アイアン作りのスタートが木型であることを、ここに来て初めて知った。

江場は「わかりました」と言い残して製作所を出て、那須の母に電話を入れた。「兄さんには、くれぐれも内緒で」と念を押し、振込先である製作所の銀行口座を指定して借金を頼み込んだ。「ゴルフで使うクラブを作るための鑄型を作る」と説明しても、母は何をいわれているのかを、理解し切れなかったようだ。

それでも翌日になって、製作所に出向くと、女性事務員から声をかけられた。「お金が振り込まれていますよ。ホントにクラブを作るのね」。それを聞いた社長は「お前の家は何をやっているんだ」とあきれた。そのはずで、当時、百三十万円と言えばトヨタクラウンの新車、しかもデラックスが買えた。

「まず図面だ」という求めに、番手ごとの従量に合わせ、アイアンヘッドのデザインを画いた。これを外注に出して、デザインに合わせて木型を作り、それを元に鑄型を作ってもらった。丸い棒型の鉄素材を熱し、プレス機にかけてヘッドの原型を作って削り、磨きをかけてシャフトを取り付ける。

江場は三セットを作って、一つは社長、もう一つは世話になった職人、残りの一つは自分の手元に置こうと思っていた。しかし、職人は「おれはゴルフをやらないからいらないよ」と、いかにも職人らしく断ってきた。



母にあれほど言うておいたが、借金が兄にばれて、あきれられた。母に聞くと、振り込み手続がわからず、兄嫁にそれを頼んだという。兄にばれないようにするのは、はなから無理な話だった。しかし、拾う神がいた。

社長が使い終わったとはいえ、まだまだ使える木型と鋳型をどうするか聞いてきた。「商売をするわけではないのでいりません」と答えると、「じゃ、ウチで買い取ってやるよ」と、百三十万円を返してくれた。「それじゃ、ただでクラブを作らせてもらったことになる」と恐縮した江場は、三十万円を出して、社長や職人さん、世話になった人たちに集まってもらい、感謝のパーティーを開いて恩返しをした。

銀座の三人展

画学生としては生意気盛りが災を招いた。ムサビ二年の時、クラスメート三人で銀座の画廊に話しをつけてそれぞれの作品を持ち寄って展覧会を開いた。うかつにも、この画廊主が受け持ちの教授と知り合いだったとは知らなかった。

画廊主からの連絡で、展覧会に顔を出したその教授から大目玉を食らった。「三人展とは百年早い」とこっぴどく叱られた。それに反発して、二流ではあったが、ある美術専門誌に「若い画学生の志と芽を摘む美術学校の教授。これが許されていいのか」と投書を送った。幸か不幸か、これがその美術誌に掲載されてしまった。すべてを匿名で書いたが、読む人が読めば、その教授が誰で、学生が誰かはすぐにわかる。教授に呼び出され、「これじゃお前らに単位をやるわけにはゆかない」と宣告され、教授と差し違える形で武蔵野美術大を去った。

(つづく)

編集後記

歳を重ねるごとにそう思うのだが、時の流れが速くなる。開場 50 周年として、広報誌の記念号を発行して来年でもう 5 年になる。その間、コロナ禍と国体の延期などがあった。それにしても、一足飛びの感がある。

国体の開催を機に、コース整備が飛躍的に向上、強化された。整備業務を受託してもらった先の力と、「われわれのコースはわれわれの手でも」と、ボランティアで協力を惜しまなかったメンバーらがもたらしてくれた、国体開催のレガシーとも言えよう。当然、客数増につながり、師走を迎えた塩原ゴルフクラブの経営陣の表情もどことなく明るい。そんな中で、このWeb会報「塩原」の発行も今年最終号としたい。

塩原カントリークラブには、知る人ぞ知る風刺漫画の名手・那須良輔さんが描いた、原画がクラブハウスのコンペルームに飾られています。平成元(1989)年に亡くなった那須さんは往年の会員で、昭和 59 年(1984)からクラブ会報「塩原」に、自筆の挿絵付きでコラムを寄稿しました。その挿絵です。

このWeb版「塩原」も来年は、開場 55 周年にちなんで、那須さんの原画の紹介から始めたいと思っています。古き良き時代を偲んで。

井上 安正